「ゆく川の」　大庭みな子（『図書』一九九二年連載）から

昭和二十（一九四五）年、ゆく夏。
月が出て、横になったり坐ったりしている人たちの白い横顔が見えた。
こおろぎが鳴いている。どうしてこおろぎが鳴いているのだろう。
「壁の割れ目で鳴いているのよ」
髪を梳いている黒い人影が言った。
わたしたちは、鉄筋三階建の小学校の校舎の最上階にリュックを枕に、毛布一枚でごろ寝していた。窓ガラスは飛び散ったのか、溶けて流れたのか、鉄格子の桟だけが残っていた。
その窓に倚って見下ろすと、太田川に二十日くらいの月が浮いたり沈んだりしていた。広島の街は遠くに光る海まで、見渡す限り瓦礫の原で、黒い鉄骨ばかりになった建物が、いくつか傾いて残っていた。

戦いに破れた国は
見渡す限り石ころと骨の河原
月の夜に流れる川は
光る蜘蛛の脚
渚にふんばり
黒い島影にゆらぐ灯は
怪物のまたたきか
人の吐く息によりそい
翅すり合わすこおろぎ

灯のともる黒い島影は似島だろうか。
「たくさんの被爆者たちが、似島に運ばれたんですって。死んでいる人も生きている人もいっしょくたに。腕をひっぱると、皮がずるりとはがれて、手袋のように脱け落ちて…」
リュックを枕にござの上に横になっている級友の一人が言った。
わたしたち救援隊の女学生たちは、戦いが終ると間もなく壊れた焼野原の広島の街に、その近郊から呼び集められたのだった。救援隊？　救護班？　何をいったい救援するのだろう。救護できるのだろうか。太田川、本川のほとり、燃え残った鉄骨コンクリートの本川小学校に配属されたわたしたち十人余りの分隊の役目は、三百人くらいの患者たちの食事をつくることだった。
広島市内を流れる太田川の河口は蜘蛛の脚のように分れてそれぞれの流れに名があるが、本川と元安川が合流するところにある相生橋を渡って、わたしたちは毎日炊事に使う薪をとりに行った。爆心地のこの辺りには燃えるものは何も残っていなかったが、そこには燃えさしの木切れを集めて束ねられた薪が積んであった。どこか、遠いところから運ばれたものらしかった。爆心地にわずかに焼け残っているものと言えば、広い通りに、まだとり片づけられずに臥っている屍体だけだった。倒れて息絶えても、炎の追ってこない、他に焼けるものの何もない広い石の通りのそこそこには、ときどきそういう屍体があった。
屍体には銀色に光る巨大な青蠅が音を立てて群がっていた。肉色の蛆がうずたかく蠢き、腐肉をむさぼるちぷちぷという音が聞こえるようであった。蠅、蛆、こおろぎ、それは確かにこの地上の生命の営みの音ではあった。